室町通の菊屋の何某の一人娘、今七才にて其さま勝れて生れつきしに、乳母腰元かづきて、入日を除ける傘さしかけて行くを濟し、〇略下

〔骨董集上編下前〕お乳母日傘といふ諺

昔は乳母をめしつかふほどの玄かるべき者の兒には、日傘をさしかけさせたるゆゑにさはいふめり、そのからかさは、丹青もてさまざまの繪をかきし也、ことに菱川の繪におほく見えて、延寶、天和、貞享の比、もはらもちひたり、これ近き世までもありしが、今はたえて諺にのみのこれり、

〔古今要覽稿器財〕雨傘。

雨傘は宗五大草紙に、雨がさは云々と見えたるより外は、ふるく雨がさといへる事聞えず、玄かれども雨零者、將蓋跡念有、笠乃山云々萬葉集と見えたるなど、みな雨がさなれば、ふるくより今の製の如き畫も有しものならんとは、上に載たる延喜式をはじめ、諸書にみえたるにても、おしはからるれども、雨がさといひたる事のふるくみえぬなり、また春日驗記延慶二年高階隆兼畫第五、俊成卿春日社參の段に、ある夜社壇にまうで侍りけるに、夜雨蕭々として社壇寂々たりければといふ詞有て圖有、それにて雨がさの製作よく玄られたり、今の製とかはりたる所もみえず、たゞ骨にかゞりなく、はじきがねをさしとほして有、按に今も此製のかさ有とぞ柄も殊の外ながくみえたり、

〔宗五大草紙下〕からかさの事

一かさの役人、墨がさは小者の役、〇略中又雨がさは公方樣御參內、八幡御社參以下、きと玄たる時は、ほういの人さし被申候、私にては中間さし候、

〔貞順故實聞書條々三〕一雨笠の事、朱をこくさし候て、ほねと柄とを黑くぬりたるは位にて候、朱色うすく候て、骨と柄の黑きは其次にて候、又朱をさゝず候て、柄も骨もぬり候はぬは下にて候、